

患者の話から(抜粋)

B型肝炎を発症してから、立っているのもつらく、床を這って移動することもあるほどでした。小学生だった子どもたちが学校に行った後は、泣きながら、一日の大半を横になって過ごす日々でした。

古くからの友人に「B型肝炎になってしまった」と電話で話したら、急に友人は黙り込んで、それ以来連絡は途絶えてしまいました。

病院では、医師から「一番うつりやすいな。それで看護師さんが注射を打つのを怖がって逃げて行ったのだな」と言われました。頭の中が真っ白になり、言い返すことも、診察室から出て行くこともできず…その医師に腕を差し出して、注射を打ってもらいました。診察室を出た時、涙がどっとあふれてきました。

私は、B型肝炎という病気を心の底から憎みました。いつまでも続く体の苦しさ、病気の進行への不安、生きて行くのはもう嫌だと思いました。子どもたちが寝た後、ベランダの手すりから身を乗り出しました。けれど、私には子どもたちがいる…どんなに苦しくても生きていかねばと、思いとどまりました。

私たちのような悲劇は二度と繰り返さないで欲しい。そして、『私はB型肝炎患者です。』と胸を張って言える社会の実現を願っています。

どうして泣いているの?



あなたは彼女が泣いている本当の理由を知っていますか?

患者講義に関するお問い合わせ・お申込みは

まずは、メールでお問合せください。

bkan.lecturer@gmail.com

担当：弁護士・瀬川宏貴

全国B型肝炎訴訟原告団・弁護団

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-2

伊藤ビル3階 (東京法律事務所)

TEL: 03-3355-0611

<http://bkan.jp/>

私たちは、B型肝炎を含むすべてのウイルス性肝炎患者が安心して暮らせるよう、国と協議を重ね、治療・支援体制の強化を目指しています。



B型 肝炎

患者の声を通して考える 「いのちの教育」

——人に寄り添う社会を目指して

患者講義 実施のお願い



ところが…

全国B型肝炎訴訟原告団

私たちは「いのち」に向き合う 教育を行っています

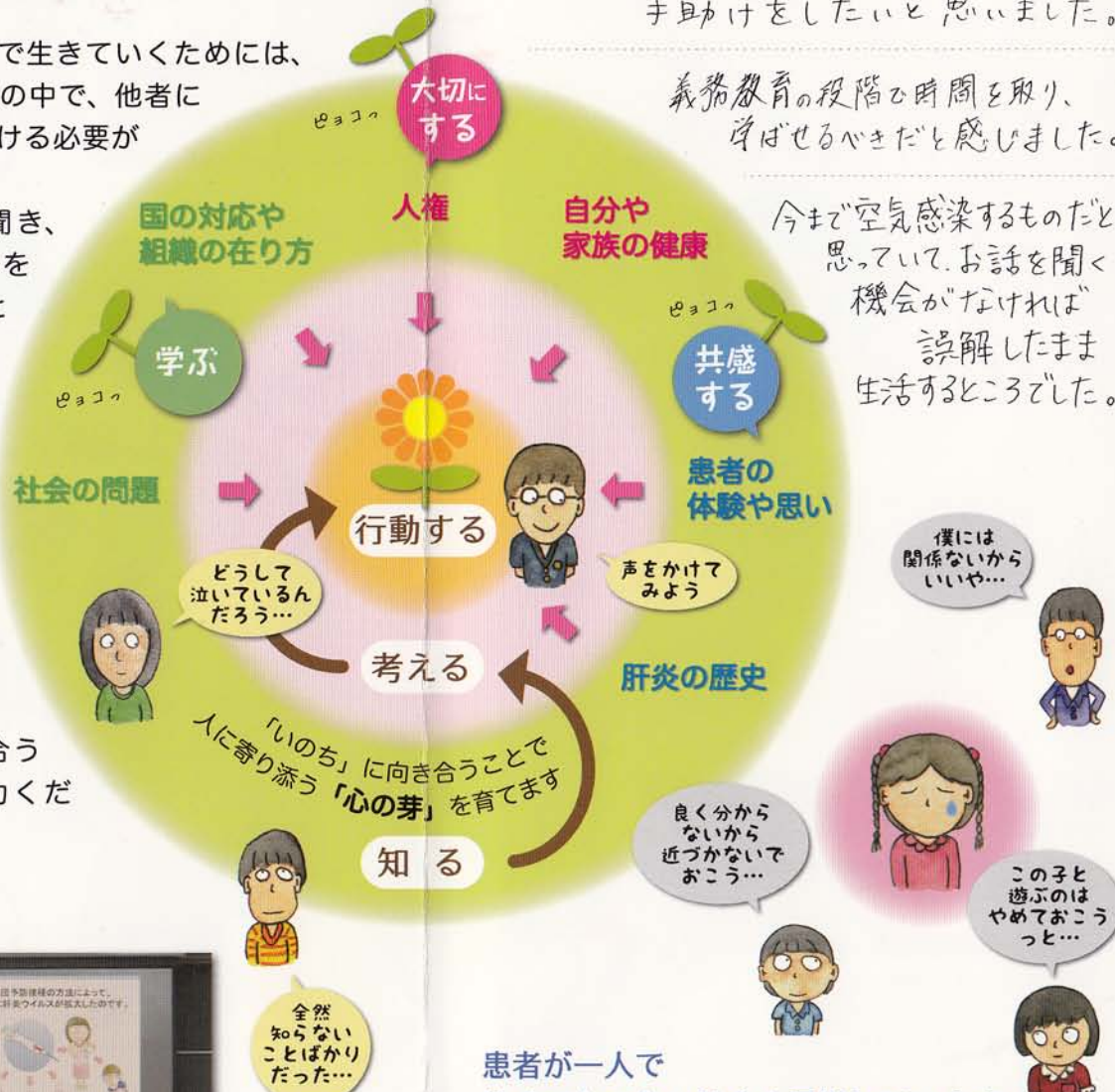
私たちが社会の中で生きていくためには、多くの人との関わりの中で、他者に共感する心を身につける必要があります。

患者の声を直接聞き、自ら何が正しいのかを考えて、寄り添うことができる人になってもらいたいと願っています。

私たちは、全ての患者が安心して暮らすことができる社会の実現を目指し、患者講義を行っています。

「いのち」に向き合う教育の実施にご協力ください。

講義の様子



患者が一人で泣くことのない社会を目指しています

患者の約7人に1人が、病気のことを誰にも相談できないと答えています。それは、正しい知識がないままに、「感染する」というイメージが強調され、偏見の目で見られたり、差別を受けたりすることがあるからです。

▼この講義を受講した学生の感想から

「自分はB型肝炎です」と言えるような社会になるために手助けをしたいと思いました。

義務教育の段階で時間を取り、学ばせるべきだと感じました。

今まで空気感染するものだと
思っていて、お話を聞く
機会がなければ
誤解したまま
生活するところでした。

僕には関係ないからいいや...

良く分からないから近づかないでおこう...

この子と遊ぶのはやめておこう...

全然知らないことばかりだった...

国の対応や組織の在り方

学ぶ

大切に
する

人権

自分や
家族の健康

共感
する

患者の
体験や思い

行動する

考える

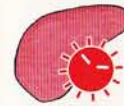
肝炎の歴史

知る

「いのち」に向き合うことで人に寄り添う「心の芽」を育てます

私たちの「いのちの教育」は、このような内容です

1 ウイルス性肝炎について



現在、肝炎ウイルスの感染者の数は、日本全国で350万人と言われていています。しかし、ウイルス性肝炎について、正しい認識を持っていない人が多いのが現状です。

2 B型肝炎がまん延した歴史について

1988年まで、国は、肝炎がまん延する危険性があることを知りながら、集団予防接種での注射器の使い回しを放置してきました。その結果、多くの人々がウイルス性肝炎に感染し、母子感染によって更に被害が拡大してしまいました。



2011年に国が責任を認めて謝罪をしましたが、患者が元の健康な体に戻ったわけではありません。では、肝炎患者はどのような現状に置かれているのでしょうか。

3 患者の声を直接聞いてください

患者やその家族が、これまでに体験した病気の苦しみや心の葛藤、願いなどを直接お話しします。



▶患者講義の様子

4 肝炎患者が置かれている状況について



肝炎患者は、病気や治療による「身体的なこと」以外にも、病気についての正しい知識が社会に伝わっていないために、差別や偏見の目で見られるという「心のいたみ」を抱えています。

たとえば、病院や職場などで「近づくとうつる」と陰口を言われて避けられたり、結婚相手の親に反対されやむなく身を引いた、B型肝炎の感染が理由で離婚したという話も多く聞かれます。

5 私たちにできることは何でしょうか？

肝炎患者が、安心して暮らすことができる社会にするために、自分たちに何ができるかを考えます。また、グループディスカッションなどで意見交換をすることで、より考える力が育ちます。